



校長室だより

行事を通じて学ぶこと

一学期のはじめにはさまざまな保健行事が行われます。内科検診や歯科検診、眼科検診、耳鼻科検診、そして心臓検診と目白押しです。内科や歯科については毎年全校児童が受診しますので会場に行ってすぐに「はい、診察」とはなりません。じっと待つ時間が出てきます。もちろん、内科検診はドクターが聴診器で音を聞いているので、静かに待つ必要があります。待っているとついのお話をする児童が出てきます。そこで静かにするように指導することになります。これも一つの学びです。また診察してもらったら「ありがとうございました」の一声があることによってボランティアで来てくださっているドクターも温かい気持ちになってくれるはずです。また遠足でバスを使うときにも乗り降りするときに運転手さんに「お願いします」「ありがとうございました」と自然に言うことができる子どもに育てたいと思っています。そのためには、その一声で相手がどう思うのかを考える力が必要になります。

人のためになる行動は「人の気持ちを考える」力につながります

先日の児童朝会でお話したことです。まず8時30分に運動場に集まっているみんなが「人のためになる行動をしている」という話の後、なぜ私が「人のためになることをしましょう」と四月から言っているのかについて話しました。困って泣いている低学年の人を見かけたらどうしますか？という話題から、その人のために何かしてあげようとするときに「なぜ泣いているんだろう」「何に困っているのか」とその人の立場になって気持ちを考えるはずで。

そして人のためになる行動は、自己有用感が高まり、自己肯定感も高まっていくと言われています。自分の考えとは違う、別の人の考えを知ることが多様で、多角的な視点を持つことになり、自分の気持ちの持ちようも変わってきます。自分がとてもはずかしいと思っていることでも、近くの友達の声や考えを聞くと、意外とそうでもないことがわかることもあります。友達の声や考えを聞くことが、自分のことを客観的にみることに繋がります。

「気持ちをきりかえる」力をつけるために

学校教育の目的は「気持ちをきりかえる力をつけるため」だと言いたくなるくらい大切な力だと思っています。子どもは気持ちの切り替えが上手くできない場合が多くあります。幼児期の子どもはイヤなときにはだだをこねて、泣きじゃくります。そして一定の時間を超えると落ち着くことができます。この時間が早い人は、きりかえる力があると考えられます。

きりかえが苦手な人は長い間、一つのことにこだわってしまって、何も活動できない状況になってしまいます。土日の前後の平日に家庭の都合でお休みをしてお出かけをしまって、その後、登校をしびってしまう子どもも少なくありません。それはきりかえの苦手さが出ているのだと思います。このような子どもにとっては毎日安定した生活リズムにしてあげることこそが必要になってきます。

子どもたちはさまざまな活動や課題に対して、「めんどくさい」と思っているようです。宿題や授業、さまざまな活動でそう思うのですが、中には給食を食べることもめんどくさいと思う人がいるようです。私たち大人はめんどくさくても、仕事にもいくし、家事も行っていて、きりかえる力がついています。子どもたちにもめんどくさくても、取り組もうとするきりかえる力をしっかりつけさせてあげたいと思っています。